

フレーゲのパズルとラッセルの命題論

伊藤 遼

京都大学、大阪体育大学

ラッセルは、自らの論理主義の立場を公にした著作 *The Principles of Mathematics* (1903) において、「命題 proposition」を心的作用から独立した自存的な複合物として理解した。こうした命題の存在論は、彼がホワイトヘッドとの共著 *Principia Mathematica* (1910-1913) が完成する頃までに放棄されてしまう。彼は命題の存在論に対する反論を ‘On the Nature of Truth and Falsehood’ (1910) においてはじめて述べるが、その反論は説得的なものではない。こうした事情から、幾人かの哲学者は、彼が自らの立場に対する説得的な反論、命題の存在論を放棄した「真」の理由を探しもとめて、様々な解釈を提示してきた。¹

近年、アメリカの哲学者 Ian Proops が提案した解釈は、従来の解釈に比べて、格段に精巧でテキストに即したものとなっている。² その要点は、ラッセルがフレーゲのパズルを解消するその仕方は、自存的複合物として理解された命題について、同様のパズルを定式化することを許してしまう、という指摘である。フレーゲのパズルとは、もちろん、同一の指示対象を持つ二つの固有名の交換可能性に関する問題である。フレーゲが、Sinn と Bedeutung を区別を導入するにあたって、このパズルを持ち出したことはよく知られている。ラッセルは、固有名と確定記述句とのあいだに生じる類似のパズルを ‘On Denoting’ (1905) における「記述の理論」によって解消する。しかし、その理論は、フレーゲのパズルそのものには適用できない。Proops は、ラッセルがフレーゲのパズルを問題視しなかった理由を彼の「見知り acquaintance」概念のある特性によって説明する。しかし、Proops によれば、そうした特性に訴えて、存在者として考えられた命題に生じる同種のパズルを解決することはできない。Proops は、このことによりラッセルは命題についてわれわれは「見知り」を持たないと結論することになり、たとえその結論自体が必ずしも命題の存在論にとって重大な問題ではないにしても、それが彼が命題の存在論を保持する動機を失うことにつながったと論じる。

本発表では、Proops のこうした解釈について、まずは彼の「見知り」の理解を詳しく論じた上で、その妥当性をテキストとの整合性と彼の見知り概念の整合性という二つの観点から検討する。

¹ 例えば、Richard Cartwright, 1987, ‘A Neglected Theory of Truth,’ in *Philosophical Essays: The MIT Press*, pp.170-185; Thomas Ricketts, 2001, ‘Truth and Propositional Unity in Early Russell,’ in Floyd, J. & Shieh, S. eds. *Future Pasts: The Analytic Tradition in Twentieth-Century Philosophy*, Oxford: Oxford University Press, pp.101-118.

² Ian Proops, ‘Russell on Substitutivity and the Abandonment of Propositions,’ *Philosophical Review*, Vol. 120, No. 2, pp.151-205.